下長小

ともに学び合い、考えを深める子どもの育成

（３年計画の２年次）

校長名　　宍戸　義彦

１　研究主題について

今年度、本校では「生き生きと輝く子」～思いやりのある子、すすんで勉強する子、体をきたえる子～を教育目標と努力目標に掲げ、それを具現化するために種々の教育活動を展開している。教育目標具現化のためには、基礎的な学習ルールを徹底させ、授業においてユニバーサルデザインの視点を取り入れ、児童の学習への意欲や主体性を高めることが大切であると考える。

昨年度、本校では、「ともに学び合い、考えを深める子どもの育成」という研究主題のもと、主に伝え合う力を身に付けさせるための指導方法のあり方について研究した。教科を問わず、自分の考えをもち、話したい、聞きたいと思えるしかけや発問の工夫を授業で実践し、検証してきた。研究の成果として、しかけの工夫により、児童が自分の考えを話したい、友達の考えを聞きたいという意欲が高まった。また、発問の工夫により、話し合う内容が焦点化され課題を解決したいという児童の意欲も高まった。また、書く活動を効果的に取り入れることにより、考えをもたせる手立てとして有効であることも検証された。さらに、「話す・聞く」表は教室に掲示し、普段の授業における話合いの指標となった。児童にとって共通理解しやすく、定期的な評価及び指導の改善を図ることができ、伝え合う力に成長が見られた。一方、課題として、全体の話合いで参加することができない児童の意見やよさを生かすことができなかったことが挙げられた。全員が参加することができるように、教師が児童の意見をつなぐコーディネート役になる必要がある。

そこで、今年度は、「子どもが課題解決したいと思えるしかけ（教材提示や発問）の工夫」「子どもの考えをつなぎながら話し合わせるコーディネートの工夫」について研究していく。教科を問わず、これらの工夫を実践することで、ともに学び合い、考えを深める子どもを育成することができると考える。

２　研究のねらい

ともに学び合い、考えを深める子どもの育成を目指して、しかけやコーディネートなどの指導方法のあり方を授業実践を通して明らかにする。

３　研究仮説

子どもが課題解決したいと思えるしかけの工夫、子どもの考えをつなぎながら話し合わせるコーディネートの工夫をすることで、ともに学び合い、考えを深める子どもを育成することができる。

４　研究内容

⑴　子どもが課題解決したいと思えるしかけ（教材提示や発問）の工夫（授業の導入場面）
⑵　子どもの考えをつなぎながら話し合わせるコーディネートの工夫（話合いの場面）

留意点・・・上記（１）（２）を進める上で次の点にも留意する。
　ア　自分の考えを書く活動を取り入れること
　イ　学年の段階に応じて「話す・聞く」表を活用すること

５　研究の経過

⑴　研究仮説に基づく授業研究

月	日	内容
６	２３	第１回授業研究（３学年）授業者　皆川　千恵教諭　　理科「風やゴムで動かそう」
９	１	第２回授業研究（５学年）授業者　田中　椋教諭　　算数「面積」
１０	１３	第３回授業研究（１学年）授業者　奈良　真優子教諭　　算数「かたちづくり」

⑵　一般研修

月	日	内容・講師・概要等
６	２	「一人一台端末活用研修」 講師：本校　川村　祐輝教諭
６	１６	「問題解決的な授業づくり」 講師：八戸市総合教育センター　副所長兼主任指導主事　松橋　祐哉先生
６	３０	・Q-U 分析
８	２５	・青森県学習状況調査採点作業
１１	２４	・特別支援学級　授業公開
１	１２	「特別支援教育の視点を取り入れた授業づくりについて」 講師：八戸市教育委員会　教育指導課　副参事兼主任指導主事　日向端　聖先生

６　研究の成果

⑴　しかけの工夫により、児童の課題解決への意欲が高まった。また、児童が問いや解決の見通しをもち、課題解決に向かうことができた。

⑵　ヒントを言わせる、話し合う内容を焦点化する、発問を工夫するなど、話合いで教師がコーディネートの工夫をすることによって、聞き手を育てるとともに、児童の理解を深めることができた。

⑶　話すことが苦手な児童にとっては、書く活動が伝える力となった。考えをもたせる手立てとしても有効であった。また、各教室に「話す・聞く」表の掲示をしたことにより、授業中、児童が発表する際に確認することができ、話合いの指標となっていた。

７　研究の課題

⑴　児童の興味・関心を高めるためだけのしかけではなく、問いをもち、課題解決につながるようなしかけを日常的に行っていくように努めることが大切である。

⑵　全員が話合いに参加し、課題解決に向かうようにするためには、教師は安心して学べる学級づくり、板書の工夫（視覚化）等を含めた、ファシリテーターになる必要がある。

⑶　引き続き、書く活動を工夫して取り入れることで、教師が児童の考えを把握していくことも大切である。また、「話す・聞く」表を見直し、本校の実態に適したものにしていく。

（記入者　寺澤　麻美）